

川崎ジュニア文化大賞受賞作品

「病院でもおいしい食事を子供たちに」

栗木台小学校 6年生 富山 怜

ぼくの小学校の給食は、とてもおいしい。好きなこんだてならいくらでもあげられる。例えば、きなこパンや生あげのしせん煮だ。でも、このおいしい給食もお母さんの作った料理も、九ヶ月間も食べられないことがあった。食べたい物を食べられないつらさを病気になって初めて知った。

三年前、ぼくは病気になって手術や治りようのため、県外の病院に入院した。そして病院の中にある小学校に転校した。授業は月曜から金曜まで毎日あったけど、体調が悪かったり治りようで部屋から出られなかったりして、後半はほとんど教室に通えなかった。ベットに横になって、窓の外をぼーとながめて家族や友達のこと、やりたいことや行きたい場所、食べたい物のことを考えたり、窓を割って外にとび出していく自分を想像したりした。できることが少ない入院生活での楽しみは、家族に会える面会時間と一時帰宅、おやつと毎回の食事だった。この病院でぼくが一番好きだったのは、天ぷらに付いてくる天つゆだった。天ぷら自体は残念ながらかたくてあまり食べられなかった。

ぼくが入院していた病棟には、赤ちゃんから中学生までの子供たちがいた。皆ぼくと同じような治りようをして長く入院している人ばかりだった。他の人もそうだったが、ぼくも治りようのえいきょうで、吐き気が強く味覚も変わり、こい味でないと味が感じられなくなった。不思議だけど甘い味だけは良く分かった。もともと食事を残すのがきらいなぼくは病院の食事を残すのがいやだった。看護師さんや家族も「無理して食べなくていいよ。」と言ってくれた。病気だから仕方がないと分かっているけど、やっぱりいやな気分だった。

クリーンルームという特別な個室がある。細ぼうや骨ずいの移植の時に入る部屋で、ばい菌やウイルスが入らないようになっている。この部屋に入ると、生のフルーツや野菜、生クリームやヨーグルト、口の中をきずつけるスナック菓子などが食べられなくなってしまう。ぼくはこのクリーンルームでクリスマスをむかえた。この日小さな喜びがあった。お医者さんが「少しだけだけならいいよ。」と言って病院で作った小さなクリスマスケーキを食べさせてくれた。生のイチゴはのっていないけど、甘いクリームとスポンジケーキがとてもおいしかった。こんな小さなことで幸せを感じたのは入院したからだったと思う。

食事は大事だ。食べられると元気になるし気持ちも前向きになる。将来、ぼくと同じような病気で長い間入院をしなくてはならない子供たちが、具合が悪くても一口でも食べてみたくなるような、毎回食事が楽しみになる病院の食事を作りたいと思う。「退院できるのはうれしいけど、病院の食事が食べられなくなるのは残念だ。」

と思われるような、おいしくて楽しいメニューを考えるのがぼくの夢だ。